

# 第7章

## ラテンアメリカの宗教

カトリック大陸の現在(いま)を知る



(写真) ブラジル・サンパウロ市内にあるキリスト教の新興プロテスタント福音派の巨大な教会  
(2018年, 近田亮平撮影)

# ラテンアメリカの宗教

カトリック大陸の現在(いま)を知る

## ■ 学ぶポイント

- ・ 植民地時代をとおして生じた2つの過程——カトリック世界が構築される過程, カトリシズムが他宗教と混淆していく過程——を理解する。
- ・ ブラジルとアルゼンチンの事例をとおして, 宗教がなぜ, そしてどのようにして政治と社会にかかわっているのかを学び, 日本と比較する。

## ■ キーワード

カトリック教会 シンクレティズム 解放の神学 ペンテコステ派 福音派

## はじめに

世界のカトリック人口の約4割が暮らすラテンアメリカ。本章では, ラテンアメリカ大陸にカトリシズムが根づいていく歴史を追いながら, 土着宗教との混淆現象や20世紀におけるカトリック教会の改革を学ぶ。さらに21世紀の動きとして, ブラジルにおけるプロテスタント福音派の政治進出とアルゼンチンのカトリック教会の社会支援活動を取り上げる。

海外での宗教体験というと、荘厳なカトリック大聖堂を訪れた経験や、留学先のホストファミリーに連れられて礼拝に参加した体験を思い出す人もいるだろう。筆者は、自身がキリスト教徒であり、宗教を研究しているということもあって、アルゼンチン滞在中にはキリスト教つながりで色々な人と出会い、興味深い体験もした。

そのひとつが、2007年に参加した「ルハン巡礼」である。ルハンというのは、首都ブエノスアイレスから北西に約70キロメートルのところにある市で、その中心に位置する大聖堂はいつも多くの人でにぎわっている。彼ら／彼女らの目的は、大聖堂に安置されているルハンの聖母像で、18世紀に最初の礼拝堂がつくられてから今日まで、人々の崇敬の対象となっている。また、毎年10月に行われる巡礼は国民的行事となっており、100万人以上がルハン大聖堂をめざして夜通し歩くのが恒例である。

筆者は、カトリック教会に集う日系人の信徒と数名のシスター（スペインやポーランド出身）たちとともに、夕方4時にルハンまで50キロメートルの地点を出発した。教会や小教区でグループをつくって参加している人、家族や友人と参加する人、なかにはすでに酔っぱらっている人もおり、さながら祭りのような雰囲気であった。

ただし、楽しく会話しながら歩けたのは前半20キロメートルほどであり、残りの30キロは脚の痛み、疲れ、寒さと眠気で、非常に辛かったのを覚えている。一緒に歩いた日系人女性は、生まれて間もない孫の小さな靴下をもってきていた。翌朝ルハン大聖堂で行われるミサで、靴下を祝福してもらうのだといった。同様に、病気の家族の写真を手に歩く人もたびたびみかけた。夜を徹して歩く——その肉体的苦しみ（犠牲）を聖母に捧げることで、さらなる祝福にあずかることができると巡礼者たちは考えているようだった。

道中には救護用テントもあり、足を痛めた巡礼者たちは応急処置を受けていた。大聖堂が近くなるにつれて、道端には卓上サイズの聖母像やロザリオを売

写真7-1 ルハンの聖母像に祈る信徒(2024年3月, 筆者撮影)



る露店が立ち並ぶ。最後の10キロメートルは仲間と手を取り合いながら這うようにして、どうにかルハン大聖堂に到着した。大聖堂の広場は巡礼者で埋め尽くされ、野外ミサが行われたが、眠りこけてしまい残念ながら何も覚えていない。後で聞いた話だが、毎年この巡礼に参加する屈強な人たちは、1年をとおして長距離を歩くトレーニングを積んでいるそうだ。ちなみにルハンまで行けない信徒のためか、ルハンの聖母像の複製をおくカトリック教会も少なくない(写真7-1)。

## 2 カトリック大陸ラテンアメリカ

2013年、史上初となるラテンアメリカ出身のローマ教皇<sup>1)</sup>が誕生した。このニュースは瞬間に世界を駆けめぐり、ラテンアメリカ諸国は歓喜の渦に包まれた。ローマ・カトリック教会は、全世界に13億9000万人（2022年時点）の信徒を擁する最大のキリスト教会である。それゆえ、ラテンアメリカはカトリック大陸とも呼ばれているが、なぜラテンアメリカにカトリック信徒が多いのだろうか？

### 2-1. カトリック世界の構築

1492年にコロンブスが新大陸に到達したのを機に、ラテンアメリカはその存在がヨーロッパ人に知られるようになったが、それよりもかなり以前から高度な文明や宗教が発展していた。現在のメキシコやグアテマラには、マヤ文明やアステカ文明、アンデス地域（現在のペルー、ボリビア、エクアドル）にはインカ文明、その他にも自然崇拝や呪術といった先住民の宗教が各地に存在していた。神への生贄として人間の命を捧げるマヤ文明やアステカ文明の宗教儀礼（人身供儀）、ミイラ化した祖先の遺体を祀るインカ文明の祖先崇拝といった独特な宗教的实践は、ヨーロッパ人たちを驚愕させた。

15世紀末以降、多くのスペイン人・ポルトガル人が未知の大陸をめざした。彼ら／彼女らを駆り立てたのは、新大陸で黄金や香辛料を手に入れて大儲けするという金銭的欲望であったが、同時にキリスト教を伝道するという宗教的情熱があったことも忘れてはならない。カトリックの宣教師は先住民の魂の征服をめざして、非常に早い時期から征服者たちに同行していた<sup>2)</sup>。1520年代、アステカ王国がスペインに征服されると、カトリックの修道会はメキシコに宣教

1) ローマ教皇はローマ・カトリック教会の最高指導者であり、バチカン市国の元首を兼任している。カトリック教会の行政およびバチカン市国の統治を行う中央機関がローマ教皇庁であり、しばしばバチカンと称される。

2) コロンブスの第2回目航海（1493年）には4人の宣教師たちが同行している。

師を派遣し、組織的な布教を開始した。そして1550年頃には、160の修道院と800人の宣教師が活動するまでになっていた。宣教師たちは先住民の言語を学びながら、熱心にキリスト教を伝えた。彼ら／彼女らを動かしたのは、「キリスト教こそが野蛮から文明へと人間を進歩させる」という信念だった。

その一方で、征服者たちは新大陸の先住民を奴隷か家畜のように扱っていた。そのような窮状をみた宣教師のラス・カサス (Bartolomé de las Casas) は、先住民を救済するために1540年、征服者たちの非道な行為を糾弾した報告書をスペイン国王に提出した (ラス・カサス 2013)。ラス・カサスの努力により、1542年にインディアス新法が制定され、先住民の奴隷化と強制労働が禁止されることになったが、この法律が実際に機能することはなく先住民の数は激減していった。

17世紀初頭には、現在のパラグアイ、ブラジル、アルゼンチンでイエズス会が、先住民グアラニー族のキリスト教化をめざして村の建設を始めた。20カ所ほどあった伝道村には、教会を中心に学校や工場、宿舎、食堂、倉庫などが建てられ、10万人以上のグアラニー族が宣教師らと暮らしていた (これらの遺跡群は現在、世界遺産に認定されている)。しかし18世紀半ば、スペインとポルトガルによってイエズス会がラテンアメリカから追放されると伝道村は崩壊した<sup>3)</sup>。

16世紀以降、布教活動を展開したカトリック教会は、比較的短期間で広大なアメリカ大陸にカトリック世界を築き上げることに成功した。病院や孤児院、学校などは教会によって設置・運営され、人々の冠婚葬祭 (出生・死亡・婚姻等) の執行や登録もまた教会で管理されていた。このようにラテンアメリカでは、植民地時代をとおしてカトリック教会が人々の生活に深く関与する——教会なしには社会が成り立たない——システムが構築された。

19世紀にラテンアメリカ諸国が独立を達成すると、カトリック教会の影響力は縮小していった。1917年憲法で政教分離を宣言したメキシコでは、カトリック教会の取締まりと違反者の罰則を強化したカジェス法 (1926年) が制定

---

3) グアラニー族への伝道に従事したイエズス会宣教師らの生き方を描いたのが映画『ミッション』 (1986年製作) である。

された。これによって教会財産は没収、聖職者は国外追放、カトリック教会が運営する学校・修道会は閉鎖され、国内にいた4500名の司祭は344名（1935年）にまで激減した。一方で、20世紀をとおしてカトリック教会が強い影響力を保持した国もあった。たとえばアルゼンチンでは、カトリック教会が歴代の政府に圧力をかけて離婚の法制化を阻止した結果、1987年まで離婚は違法とされ、人々は伴侶と死別しないかぎり再婚もできなかったのである。

## 2-2. シンクレティズム（宗教混淆）

植民地時代、先住民は強制的にキリスト教に改宗させられた。しかし、彼ら／彼女らは自分たちの神々を捨てることなく、キリスト教に土着の信仰を紛れ込ませて信じるようになった。このように、起源の異なる複数の宗教的要素が融合して信仰されることを「シンクレティズム」(宗教混淆)<sup>4)</sup>と呼ぶ。とくに宣教師の数が非常に少なく、改宗が徹底しなかったアンデス地域ではこの現象が顕著であった。

シンクレティズムの典型としては、メキシコで最も敬愛されている「グアダルーペ<sup>5)</sup>の聖母」(María Guadalupe)が挙げられる。1531年、アステカ神話のトナンツィンという女神を祀る丘で、1人の先住民の前に聖母マリアが現れた。その後、人々はこの聖母を拝むようになったが、そこには女神トナンツィンへの信仰が混在していた。この出来事が「聖母の出現」<sup>6)</sup>として19世紀末にカトリック教会から公式に認定されると、聖母像が祀られているグアダルーペ大聖堂は聖地として知られるようになり、世界中から巡礼者が訪れている。

シンクレティズムはまた、アフロ・アメリカン宗教と呼ばれるアフリカ由来の宗教の特徴ともなっている。ラテンアメリカの先住民人口が、過酷な労働やヨーロッパから持ち込まれた天然痘によって激減すると、労働力不足を補うために大量の黒人奴隷がアフリカから連れて来られた。キリスト教への改宗を強

4) 混淆（こんこう）とは、異なるものが入り混じること。

5) 現在メキシコ・シティを構成する管轄区域のひとつ、グスタボ・A・マデロのかつての地名。

6) これまで世界中で報告された聖母の出現は数千件にも上るが、カトリック教会が公認したのはわずか16件（2024年時点）であり、ラテンアメリカではグアダルーペの聖母のみである。

制された奴隷たちは、キリストを祖先の太陽神に見立てたり、両者を同一視しながら祈りを捧げるようになった。このようにアフリカの神々をカトリックの神や聖人・聖母に置き換えることで、祖先の信仰を維持し、それを子どもや孫に継承したのである。今日、ブラジルの「カンドブレ」(Candomblé) やキューバの「サンテリーア」(Santería)<sup>7)</sup> などのアフロ・アメリカン宗教は、黒人の子孫のみならず国内外で多くの人に信仰されている。

ラテンアメリカの祭礼には、カトリックと土着宗教の要素が融合したものが多くあるが、最も有名なのがメキシコの「死者の日」(Día de los Muertos) であろう。これはカトリックの祝日である「諸聖人の日」(Día de todos Los Santos)<sup>8)</sup> にあわせて行われる伝統行事であり、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている。年に一度、家族や友人たちが集まり、故人の霊を現世に迎えるという点では日本のお盆のようでもあるが、家庭や墓地につくられた華やかな祭壇に大量の供物が捧げられ、パーティやパレードがにぎやかに行われる様子は祝祭そのものである<sup>9)</sup>。この祭礼期間中は死者が崇敬の対象となり、大人の死者には酒や生前愛用していた道具などが、子どもの死者にはお菓子や玩具が供えられ、人々は死者たちを盛大に歓待する。

## 2-3. カトリック教会の改革

カトリック教会史上、最も画期的な出来事といわれるのが第二バチカン公会議(1962~1965年)<sup>10)</sup> である。教会は自らの存在意義を問い直し、現代世界との関わりをなかでその使命をいかに果たしていくかが議論された。公会議文書のひとつ『現代世界憲章』では、カトリック教会が現代社会に生きる人々の精神的・物質的苦悩の解決に寄与し、基本的人権を擁護する姿勢が明確に示され

---

7) 1959年のキューバ革命以降、民衆文化を称揚する政策によりサンテリーアの儀礼歌や踊りはキューバ固有の伝統芸能として劇場などで上演されるようになった。

8) 諸聖人の日(11月1日)とは、カトリック教会のすべての聖人と殉教者を記念する日であり、その翌日が亡くなったすべてのキリスト者を記念する日とされている。

9) 映画『リメンバー・ミー』(2017年製作)はメキシコの死者の日を題材にしたものである。

10) 公会議とは、全世界の教会から司教が集まり教義や典礼、教会法などについて審議決定するカトリック教会の最高会議である。初めての公会議は325年の第一ニケア公会議であり、第二バチカン公会議は第21回目となる。

る等、その後のカトリック教会を方向づけるものとなった。

1968年、第二バチカン公会議の決定をラテンアメリカに適用することを目的として、第二回ラテンアメリカ司教協議会総会（メデジン会議）<sup>11)</sup>がコロンビアで開催された。会議に参加した司教たちは、ラテンアメリカで蔓延する「制度化された暴力」——政治・社会・経済の構造的欠陥を原因とする貧困や抑圧、差別——が人々を苦しめていると断言し、これらの社会的不正に対して教会が無関心であってはならず、聖職者は貧困者との連帯を強め、彼ら／彼女らの代弁者となるべきだと主張した。

このメデジン会議を方向づけたのが、ラテンアメリカで生まれた新しい神学思想「解放の神学」(Liberation theology)であった。解放の神学とは「世界をただ考察するにとどまらず、世界の変革の過程に進んで参加しようという神学」(グティエレス 2000, 20-21)であり、キリスト教基礎共同体がその実践の場となった。

「キリスト教基礎共同体」とは、聖職者不足が深刻なラテンアメリカで始められた司牧形態で、司祭と信徒で形成される通常の教会とは異なる、カトリック信徒たちで構成される信仰共同体である。彼ら／彼女らはともに祈り、聖書を読み、信仰と日常生活を結びつけて、自分たちの権利を守るために具体的な活動（相互扶助や抗議運動）を行った。これらの基礎共同体は、とくにブラジルや中米で広がりを見せ、1980年代初頭のブラジルには約8万の共同体があったといわれる。

## 2-4. 宗教人口の変化

カトリック教会はラテンアメリカの地で500年以上、政治や経済に影響を与えながら人々の生活に根づいていったが、20世紀末頃からその状況は変わってきている。

表7-1はラテンアメリカ各国の宗教人口（%）を表したものであるが、1995年に80%であったラテンアメリカ全体のカトリック人口が、2024年には54%

11) カトリック教会は教皇を頂点とする聖職者位階制（司祭→司教→枢機卿→教皇）によって階層的に組織されている。

表7-1 ラテンアメリカ諸国の宗教比率：2024年(%)

国名	カトリック	プロテスタント	無宗教
アルゼンチン	63	9	20
ボリビア	63	20	9
ブラジル	46	28	17
チリ	45	12	37
コロンビア	57	18	20
コスタリカ	52	25	18
ドミニカ共和国	43	28	25
エクアドル	65	19	13
エルサルバドル	40	35	21
グアテマラ	39	40	18
ホンジュラス	36	43△	19
メキシコ	68	5▼	15
パナマ	52	29	11
パラグアイ	72△	7	0▼
ペルー	64	21	9
ウルグアイ	33▼	6	52△
ベネズエラ	72△	8	14
ラテンアメリカ全体	54(80)	19(6)	19(4)

(注) 最大値は△, 最小値は▼で表している。ラテンアメリカ全体の( )は1995年数値。

(出所) *Informe Latinobarómetro 2024*のデータをもとに筆者作成。

になっている。ここ数十年でほとんどの国でカトリック人口が減少しており、アルゼンチンでは1960年に国民の90%を占めていたカトリック人口が、2008年には76.5%、2024年には63%と激減している<sup>12)</sup>。宗教的な制度や規範が世俗的な形態へと置き換わっていく世俗化が進んだことに加えて、カトリシズム以外の宗教を信仰することから生じる社会的デメリット（コミュニティからの排除など）がなくなったことも、ラテンアメリカ地域におけるカトリック人口減少の大きな要因と考えられている。

12) 国立科学技術研究評議会（CONICET）が2019年に行った調査（[Segunda encuesta nacional sobre creencias y actitudes religiosas en Argentina: Sociedad y religión en movimiento](#)）から。

その一方で、増加しているのがプロテスタントと無宗教<sup>13)</sup>である。1995年にラテンアメリカ全体で6%しかいなかったプロテスタント人口は、2024年時点で19%にまで増加しており、その多くはペンテコステ派教会に所属している。「ペンテコステ派」とは、20世紀初頭の米国で誕生したプロテスタントの一派であり、世界中に3億人近くの信徒をもつ (Schneider 2022)。新約聖書には、イエスが昇天した後、弟子たちが聖霊の力を受けて人々の病気を癒し、悪霊を追い出していた様子が記されているが、このような聖霊による奇跡や超自然的な癒しが今も存在する、と信じているのがペンテコステ派である<sup>14)</sup>。ペンテコステ派は1960年代にブラジルや中米諸国で広がり、その後も1980年代アルゼンチンで大規模なペンテコステ運動<sup>15)</sup>が起こるなど着実な成長をみせている。

2019年の宗教意識調査によると、アルゼンチン国民の15.3%がプロテスタント（うちペンテコステ派は13%）、18.9%が無宗教であった。これを教育レベル別にみると（図7-1）、初等教育中退者と初等教育（5～6年）修了者は他のグループ（中等教育修了、大学修了）と比較して、プロテスタント（ペンテコステ派）の割合ははるかに高いことがわかる。アルゼンチンでは初等教育と中等教育の合計13年間は義務教育とされており、貧困層には義務教育を修了していない者が非常に多い。つまり、ペンテコステ信仰は学歴が低い貧困層を中心に拡大していることがわかる。さらに、彼ら／彼女らの53.1%が週に1度以上教会の礼拝（祈祷会等その他集会を含む）に参加しており、カトリックの12.9%を大きく上回っているのも特筆すべき点である。

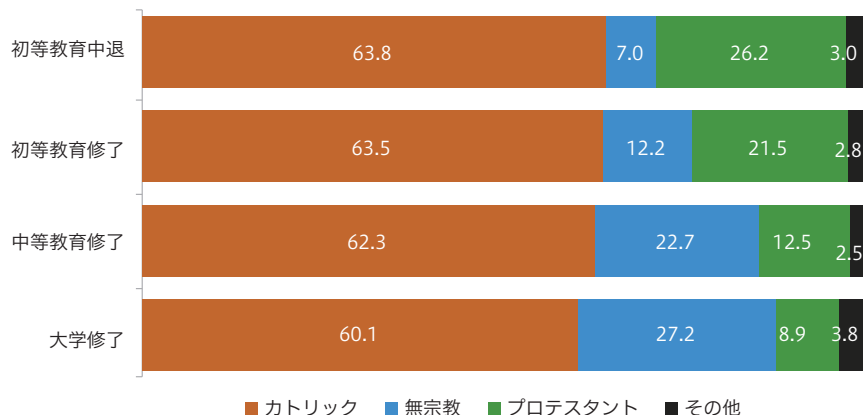
貧しい人々がこのように熱心にペンテコステ派教会に通うのは、なぜだろうか。ペンテコステ派教会では、本来あるべき健全な形への回復を意味する「癒し」が肉体的・精神的なものにとどまらず、家庭経済の癒しや人間関係の癒し

13) 無宗教とは、どの宗教（団体）にも所属していない人という意味であり、そのすべてが無神論者というわけではない。

14) 16～17世紀には奇跡や癒しは呪術的なものとしてプロテスタント教会のなかで徹底的に排除され、聖霊の働きは原始キリスト教時代に終わったと考えられるようになった。今日でも伝統的なプロテスタント諸派の多くで同じような理解がされている。

15) アルゼンチンのペンテコステ運動については（渡部 2010）を参照。

図7-1 信仰している宗教：2019年(教育レベル別)



(出所) Segunda encuesta nacional sobre creencias y actitudes religiosas en Argentina (2019)のデータをもとに筆者作成。

としても理解される。礼拝のなかで牧師が会衆に向かって（または信徒1人ひとりに手を当てて）癒しの祈りをしたり、癒された個人がそれについて教会内で公に語ることも少なくない。さらに、牧師が信徒に収入の10分の1を献金として捧げるよう奨励する際にも、その後に受ける経済的祝福を宣言し、自らの体験（忠実に献金した結果10倍になって返ってきた等）を語る。このように聖霊による奇跡を常に教会で見聞きする信徒たちは、自分も癒されたい、祝福されたいと願い、教会に足を運ぶと考えられる。ペンテコステ派が強調する、聖霊による癒しや奇跡、経済的祝福は多くの人を惹きつけるのみならず、その教えや宗教的实践を取り入れるカトリック教会も増加しており、カトリック・カリスマ派と呼ばれている。

## 3 注目される動きと21世紀の顕著な変化

### 3-1. 福音派の政治進出——ブラジル——

表7-1が示すように、ブラジルのプロテスタント人口は28%であるが、そのうちの7割以上（国民全体の約20%に当たる）が福音派に属している。「福音派」とは、聖書を誤りのない神の言葉であると信じるプロテスタントの人々で、イエス・キリストを個人的な救い主として受け入れることと、聖書の教えを忠実に守って生きることを強調する<sup>16)</sup>。倫理面では同性愛や人工妊娠中絶に反対するなど保守的な傾向が強く、ペンテコステ派もこれに含まれる。

ブラジル議会に占める福音派の割合はさらに高く、議員全体の3分の1（2019年時点で下院195名、上院8名）が福音派であり、議員団を結成するほどの勢力となっている。議員団とは、特定のテーマに関する法案を成立させるべく超党派の議員でつくられる結社であり、福音派議員団の規約には「家族や人類の生の保護にかかわる政府の政策やプログラムを憂慮し監視する国会議員の集まり」と記載されている。彼ら／彼女らの共通の目的は、福音派の教義・価値観に反するような政策の実施や法律制定を阻止することであるといえる。

では、実際どのようにして彼ら／彼女らは、福音派の教義や価値観を政治に反映させようとしているのだろうか。同性婚を例にみてみよう。2011年ブラジルの最高裁判所は同性婚を認める司法判断を下したが、それに反対した福音派議員団の議員たちは次々に法案——同性婚を認めた最高裁による司法判断の差し止めを求める法案、同性婚の是非を問う国民投票の実施を求める法案、福音派教会が同性カップルの挙式を拒否する権利を求める法案など——を提出した。しかし2013年、最高裁の司法判断に従う形で法律が整備され、ブラジル

16) 唯一の神を信じ、隣人を愛し、福音（イエスの死と復活によってもたらされた人類の救いと神の国に関するよい知らせ）を世に伝える、という聖書の中心的教えはもちろんであるが、彼ら／彼女らは「神が天地万物を創造した」という旧約聖書の記述もそのまま信じている。それゆえ米国では、進化論を教える公立学校に子どもを通わせたくない考える人々が自宅子どもを教える「ホームスクーリング」が盛んとなっている。

で同性婚が認められるようになった<sup>17)</sup>。

また2015年には、福音派議員団から下院議長が出て話題となった。下院議長とは審議する法案の優先を決める権限を有しており、議長がその法案の重要性を認めなければ審議の対象にすらならず、議会でその法案が成立する可能性はゼロに等しくなる。言い換えると、福音派の教えに反するような法案の成立を、初期の段階で阻止することができるというわけである。このようにブラジル福音派の政治進出には目を見張るものがあるが、それを可能にしたのは、現在も増加を続ける福音派信徒の存在であることを忘れてはならない。福音派信徒の42%が、宗教関係のリーダーが選挙に出馬するべきであると考えており、同様に考えるカトリック信徒の割合25%を大きく上回っている（近田 2016）。

### 3-2. カトリック教会の社会支援——アルゼンチン——

アルゼンチンでは、長年にわたってカトリック教会が政治的な影響力をもっていたが、民政移管が行われた1983年を境にその状況は大きく変化した。軍事政権（1976～1983年）を支持していたカトリック教会は、軍部による一般市民の拉致や殺害等の国家暴力<sup>18)</sup>を黙認し、国民からの信頼を失った。2008年の宗教意識調査<sup>19)</sup>によると、宗教が行うべき活動として多くの人が「助けを必要とする人々への支援」(27.2%)と答えたが、「物事における善悪の判断を示す」と回答した人は4%にすぎなかった。アルゼンチン国民がカトリック教会に求めているのは、貧困者や社会的弱者に対する支援<sup>20)</sup>であることがわかる。ここでは、近年注目されているカトリック教会の社会支援活動を紹介する。

今日、アルゼンチン国内には約5000のスラムがあるが、そこに暮らす人々

---

17) ブラジルのケースは、法案が議会で審議・採決され成立するという通常の立法プロセスとは異なり、世界でもめずらしい。

18) 軍部や警察は反体制派のみならず一般市民をも弾圧の対象とし、日常的に誘拐や逮捕、拷問を行っていた。後の公的報告によると8961名の一般市民が行方不明となり、彼ら／彼女らが再び生きて帰ることはなかった。

19) 国立科学技術研究評議会が行った調査（Primera encuesta sobre creencias y actitudes religiosas en Argentina）。

20) カトリック教会の支援活動として最も普及しているのは、コメドールと呼ばれる無料食堂や食料品等の無料配布である。

の間で合成麻薬パコが蔓延し、深刻な社会問題となっている。この合成麻薬は低品質で毒性が強く、安価なことからアルゼンチンでは「貧困者の麻薬」として知られている。2008年、このような状況を憂慮したスラム司祭<sup>21)</sup>たちが、ブエノスアイレス市南端のスラムに「キリストの家」地区センターを立ち上げた。全国に広がるキリストの家地区センターの活動はおもに、食事の提供、依存症の治療プログラム、職業訓練、法律・福祉相談などである。また、スポーツや音楽といったさまざまなプログラムも盛んに行われているが、これは子どもたちが学校以外の時間を持て余して薬物に手を出さないようにするためであり、彼ら／彼女らを危険から遠ざけるねらいがある。

さらに、地区センターによって内容は異なるが、青年や大人向けの識字教室や職業訓練も提供されている。貧しいスラムやコミュニティでは、日雇い労働や物売りといったインフォーマル労働に従事する人が非常に多く、彼ら／彼女らは常に失業と隣り合わせである。失業した父親が薬物依存やアルコール依存になり、家族に暴力をふるって家庭が崩壊するケースも少なくない。このような事態を未然に防ぎ、貧困から抜け出すためには経済的自立が不可欠であり、そのためにも仕事に直結するような技術の習得が重要となる。ほかにも、福祉相談やDV相談など多岐にわたるプログラムの運営は、スタッフやボランティアを中心に、カウンセラー、ソーシャルワーカー、弁護士といった専門家によって支えられている。

2024年現在、全国で約200のセンターが活動しており、スラムやコミュニティに根差した地区センターのほかにも、リハビリセンター、クリニック、職業訓練センター、元受刑者の社会復帰センターなどがある<sup>22)</sup>。キリストの家で支援を受けた人は、これまでに3万人以上を数え、政府の麻薬予防撲滅計画庁からも高く評価されている（渡部 2024）。

---

21) スラム司祭とは、スラムで生活しながら住民のためにミサや洗礼など行うかたわら、住民の生活向上やスラムの環境改善のために活動する司祭たちであり、その起源は第二バチカン公会議後の1960年代末である。

22) 2017年にはトランスジェンダーのための居住支援施設も開設された。詳細は渡部（2024）を参照。

第3節で学んだラテンアメリカの事例をふまえて、日本における宗教の社会的役割、そして宗教と政治の関係について考えてみよう。

日本では宗教の布教活動に対するイメージが概してよくないことから、宗教団体が行う社会支援活動も「どうせ布教が目的だろう」と懐疑的な見方をされることが多かった。しかし、近年その傾向は大きく変化している。1995年に起きた阪神淡路大震災では、多くの宗教団体——カトリック、プロテスタント、仏教諸宗派、神社神道、新興宗教の諸団体——が被災地での救援活動に従事した。具体的な支援内容は、緊急支援物資の運送・配布、炊き出し、避難所のトイレ掃除などであり、被災者の心のケアを率先して行うことはあまりなかった<sup>23)</sup>。

しかし2011年の東日本大震災を機に、人々の心をケアするという宗教の役割が再評価されるようになった。震災の2カ月後、曹洞宗住職の金田氏は軽トラックに喫茶道具を積んで被災地を廻り、ケーキやコーヒーを無料で振る舞いながら被災者の話を聞く(傾聴する)という活動を始めた。この移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」<sup>24)</sup>は、突然の死別や喪失によって心に深い傷を負った被災者の声に傾聴し、心の負担を軽減させることを目的としていたが、宗教者としてのサポートが求められる場面——家族の死をどう受け止めたらいいか尋ねられる等——も多くあったという。僧侶、司祭、牧師、神主など宗教を超えて多くの聖職者がこの活動に参加し、熊本地震(2016年)や能登半島地震(2024年)の被災地でも活動が広がっている。これらの事例は、宗教者による困難な状況におかれた人々への支援という営みが、現代の災害時にも受け継がれていることを示している。

23) 三木英編 2001.『復興と宗教——震災後の人と社会を癒すもの』東方出版.

24) 手書きの看板には「Monkは英語でお坊さんのこと。平穏な日常に戻るには時間がかかると思います。あれこれ『文句』の一つも言いながらちょっと一息つきませんか? お坊さんもあなたの『文句』を聴きながら一緒に『悶苦』します」と書かれている。

その一方で、安倍元首相銃撃事件（2022年）以来、政治と宗教の関係が問題視されている。内閣の大臣をはじめ自民党幹部や野党議員までもが、旧統一教会（世界平和統一家庭連合）と関わりをもっていたという事実は世間を驚かせた。しかし、これを安易に「政教分離に反する事態」と考えるのは不適切である。日本国憲法では政教分離規定として、宗教団体が国から特権を受け政治権力を行使すること、国が宗教教育や宗教活動を行うこと、そして、公金を宗教団体の維持や便益に支出することが禁じられている<sup>25)</sup>。しかし、政治家が特定の宗教団体の信徒であることや、宗教団体が政党をつくることは可能であり、宗教団体が特定の政治家を選挙で応援する姿勢を示したとしても、政教分離違反には当たらない。実際、これまでに僧侶や牧師でありながら国会議員になっている人も数多くいる（2025年現在）。

つまり日本でもブラジルと同様、僧侶や熱心な仏教徒たちが議員となって国会で一大勢力を形成しても違法にはならない。重要なのは、国民が誰に政治を任せるか——選挙で誰に投票するか——ということであり、その意味において国民1人ひとりの責任は重いといえる。

#### 【参考文献】

##### 〈日本語文献〉

- グティエレス、グスタボ 2000. 関望・山田経三訳『解放の神学』岩波書店。
- 近田亮平 2016.「ブラジルにおける国家とキリスト教系宗教集団の関係——福音派の台頭と政治化する社会問題」宇佐見耕一・菊池啓一・馬場香織編『ラテンアメリカの市民組織——継続と変容』アジア経済研究所, 217-254.
- ラス・カサス 2013. 染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫。
- 渡部奈々 2010.「アルゼンチンにおけるペンテコステ派の拡大」『ラテンアメリカ研究年報』(30): 112-130.
- 2024.「現代アルゼンチンにおけるカトリック教会と国民宗教意識」伊達聖伸・渡辺優編『西洋における宗教と世俗の変容 I カトリック的伝統の再構成』勁草書房, 191-217.

25) 日本国憲法 20 条 1 項後段, 20 条 3 項, 89 条前段の条文より。

〈外国語文献〉

Schneider, Nicolas I. 2022. "Pentecostals/Charismatics." In Kenneth R. Ross, Ana María Bidegain and Todd M. Johnson, eds. *Christianity in Latin America and the Caribbean* (Edinburgh Companions to Global Christianity). Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 322-334.

▶▶ 学んでみよう

---

- ・シンクレティズムの一例として日本のマリア観音が挙げられるが、いつ・誰が・何のためにつくったのかを調べて、ラテンアメリカのシンクレティズムとの共通点・相違点などを考えてみよう。
- ・日本にはホームレス支援や子ども食堂を開いている宗教団体も多いが、一般的なNPOやボランティア団体が行う活動と違いはあるだろうか？ あるとすればどこが違うかをクラスメイトと話し合ってみよう。
- ・ラテンアメリカにも宗教政党が活動している国がある。どんな政党があるか、規模や勢力（議席数等）、マニフェストなどを調べてみよう。

■ 「宗教」をさらに学べる文献紹介

---

加藤隆浩編 2009.『ラテンアメリカの民衆文化』行路社。

第3章から第5章ではメキシコの死者の日、サンタムエルテ（死神）信仰、英雄的盗賊を聖人とあがめる民衆信仰について論じられており、本章で扱うことのできなかった人々の信仰における多様性を知ることができる。また第12章ではラテンアメリカの食文化がクリスマスやイースターといったカトリックの年中行事とどのように結びついているか紹介されていて興味深い。

立花隆 2022.『インディオの聖像』文藝春秋。

1986年から1987年にかけてイエズス会の伝道村を現地取材した著者がキリスト教と異文化の衝突の歴史を読み解く。グアラニー族がつくったカトリック聖像や伝道村遺跡の写真も豊富に掲載されており、歴史を超えた人々の信仰の営みに迫ることができる良書である。

板垣真理子 2009.『ブラジル紀行——パイアア・踊る神々のカーニバル』スペースシャワーネットワーク.

アフリカをルーツとするブラジルのアフロ・アメリカン宗教や音楽についての旅行記。写真家でもある著者が体験したカンドンブレの入信儀式や祭りの描写と写真は非常にリアルで、オリシャ（カンドンブレの神々）にまつわる神話も面白い。

(渡部奈々)

©IDE-JETRO 2026

本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

